

4 採卵鶏農場のサルモネラ汚染に対するリスクコントロール

- 積極的な取り組みの一例 -

ミズキアキフミ
小山亜紀・○水木亮史（富山県西部家畜保健衛生所）

【はじめに】

管内一農場において、*Salmonella Enteritidis*（以下 SE）が分離され、農場と家畜保健衛生所が協力し、サルモネラ汚染のリスクコントロールに積極的に取り組んだので、その概要を報告する。

【経緯】

当該農場は、高床式ウィンドレス鶏舎 1 棟、高床式セミウィンドレス鶏舎 3 棟、ウィンドレス鶏舎 2 棟の計 6 鶏舎を保有し、約 20 万羽を飼養する採卵鶏農場である。

本農場は、毎月、当所に依頼し、糞便材料及び拭き取りによる環境材料を用いたサルモネラ検査を実施していた。本検査において、2014 年 3 月と 7 月にそれぞれ 1 鶏舎の糞便堆積個所から SE が 1 検体ずつ分離された。

【指導内容】

SE が分離された 2 鶏舎は、いずれも高床式鶏舎であり、SE 分離は 1 階の糞便堆積個所のみであったことから、鶏群汚染の可能性は低く、ネズミなどの媒介動物による環境由来である可能性が高いと考えられた。しかし、当該農場は、山間部という立地条件や鶏舎の老朽化から今後もサルモネラの侵入リスクは高いと推察された。

そこで、サルモネラ汚染リスク要因に着目し、①鶏群感染リスクに対しては、菌分離鶏舎の誘導換羽を中止、②媒介動物による侵入リスクに対しては、駆除回数を増加、③鶏舎内残存リスクに対しては、空舎時検査の実施、④侵入時汚染拡大リスクに対しては、定期的検査の実施、⑤人による持ち込みリスクに対しては、一般衛生管理の改善指導を行った。

【結果及び考察】

今回、サルモネラ汚染への即時対応に加え、リスク要因分析による包括的な対策を行ったことで、サルモネラ汚染の拡大を防ぐことができ、さらには農場のサルモネラ汚染のリスクコントロールを行うことができた。

対策の 1 つとして実施した誘導換羽の中止は、サルモネラ感染リスクの低減効果が高い一方で経済的な損失が大きく、経営者として容易に決断できない事項であった。しかし詳細な説明を丁寧に行うことでの誘導換羽の中止が選択され、さらに媒介動物に対して駆除回数を増やす対応がとられた。また、同時期より取引先から求められた鶏舎のサルモネラ検査成績書の定期的提出を契機とし、経営者が衛生管理に前向きに取り組むようになり、当所より提案した対策事項を積極的に取り入れ改善が図られた。

本事例では、農場からの依頼検査結果の活用と家畜保健衛生所による詳細な調査・分析により汚染状況の明確化、リスク要因の把握、並びにその対策を行うことができた。継続的な検査と指導によって、今後も当該農場のサルモネラ汚染のリスクコントロールは可能であり、他農場においても本事例は応用できると考える。